

イタドリは本州、四国、九州（奄美大島以北）、台湾、朝鮮（済州島）にのみ分布する。北海道にも分布すると報告されることがあるが、エゾイタドリ *R. sachalinensis* var. *intermedia* Tatewaki の誤認であると思う。

イタドリ属 *Reynoutria* を広義のタデ属 *Polygonum* から区別するのがよいかどうかという問題があるが、イタドリ類は5枚の花被の内、外側の3枚は花後に生長して、顕著な3枚の翼となって果実を包む。雌雄異株であるのも特徴である。このような特徴はツルドクダミ属 *Ptleuropterus* やソバカズラ属 *Fallopia* が近いものである。タデ属からは分離して別属として扱うのがよいと思う。

Reynoutria fargesii (Hance) Yamazaki, comb. nov.

Polygonum fargesii Hance in J. Bot. 21: 100 (1883).

Polygonum cuspidatum auct. non Sieb. et Zucc.: S. Moore in J. Bot. 13: 231(1875); Franchet, Pl. David. 1: 256 (1884); Forb. et Hems1. in J. Linn. Soc. Bot. 26: 336 (1891); Ic. Corm. Sinic. 1: 567, t. 1134 (1972).

Polygonum yunnanense Lévl. et Vnt. in Fedde, Rep. Sp. Nov. 6: 211 (1908).

Polygonum reynoutria Makino var. *ellipticum* Koidz. in Bot. Mag. Tokyo 31: 259 (1917).

Reynoutria henryi Nakai ex Migo in J. Shanghai Sci. Inst. sect. III, 3: 92 (1935).

Reynoutria yunnanensis (Lévl.) Nakai ex Migo in J. Shanghai Sci. Inst. sect. III, 3: 229 (1937).

Reynoutria elliptica (Koidz.) Migo ex T. B. Lee, III. F1. Korea: 304 (1979), p. p. excl. fig. The figure is ascribed to *R. japonica*. It appears to be drawn from the plant of Chejudo.

Distr. Korea and C. to W. China.

A species of *Reynoutria* in Korea and China is frequently treated as conspecific with *Polygonum cuspidatum* Sieb. et Zucc. (= *Reynoutria japonica* Houtt.). However, this species differs from the Japanese ones by the chartaceous orbicular leaves with shortly acute apex and rounded base, the fruits with chartaceous not membranaceous wings and longer stipes 4 – 7 mm long. It is more appropriate that the Korean and Chinese plants are treated as a distinct species. *Polygonum fargesii* Hance is the earliest name for this species.

(東京大学理学部附属植物園)

メダラについて (山崎 敬)

Takasi YAMAZAKI: On a subunarmed form of *Aralia elata* (Miq.) Seemann

メダラの学名について常谷氏は Franchet et Savatier が主張した var. *canescens* は、そのもとになった *A. canescens* Sieb. et Zucc. がタラノキなので、メダラは *A. elata* (Miq.) Seem. f. *subinermis* とすべきであると主張した (本誌, 67: 365, 1992)。これについて私の見解を述べておきたい。中井猛之進氏 (1924) は *A. canescens* Sieb. et Zucc. はタラノキであるとして var. *canescens* Fr. et Sav. から Sieb. et Zucc. の引用を除外して、メダラであると考えられる Franchet et Savatier の報告を基準にしてメダラの学名を組み替えた。Rehder (Man. Cult. Pl. ed. 2: 680, 1940), 原 寛 (日本

種子植物集覧3: 183, 1954) もこれを採用した。これとは別に Schneider (1909) も *A. chinensis* に組み替えて Franchet et Savatier から始めると同じ処置をしている。私も余りにせずに従来の処置に従ったのだが、Type method の考えからすれば、この処置は適当でないので、常谷氏が指摘したとおり Siebold et Zuccarini から始めるべきである。したがって *A. canescens* Sieb. et Zucc. がタラノキかメダラかが問題となるが、その前にどういうものをメダラというのかをはっきりさせておかねばならない。

メダラと呼ぶものには二つの考え方があって、

刺が少なく、葉の裏面脈状に帯褐色の縮毛のあるものをメダラと呼ぶ場合（大井 1953, この場合の刺は茎とも葉ともことわっていないが、Franchet et Savatier の記載を基準にしているから葉のことであろう）、刺に関係なく葉の裏面の毛の少ないものをタラノキ、多いものをメダラと呼ぶ場合（牧野図鑑, 初版, 1940）とがある。両者はいろいろな本に載っているなかでの両極端の見解であるが、ともに Franchet et Savatier の分類の一部を取り上げたものである。Franchet et Savatier は葉の裏面に毛が少なく、脈上に伏した毛があり、葉柄に刺のあるものを *α. glabrescens*（タラノキに該当する）。葉の裏面に密に褐色の毛（標本だから褐色なのであろう）があり、葉柄に刺のないものを *β. canescens*（メダラに該当する）と区別した。現在の多くの著書もほぼこの線に沿って両者を記述している。この分類で妥当なのかどうか問題である。

メダラは昔から知られていたものなので、どういうものをメダラと呼んでいたかを知る必要がある。小野蘭山の本草綱目啓蒙（1803-1806）には「木に刺あり、葉大にして刺なく、背に毛のあるものあり、メダラ（藩州）と呼ぶ」とあり、飯沼慾齋の草木図説、木部（北村編）ではほぼ蘭山と同じだけれど、葉の背に白色あるものとなって毛には触れていないが、白色は毛の誤りかもしれない。毛の問題は別として、葉柄に刺のないものをメダラと呼んでいたことがわかる。標本を調べると葉柄に刺のないものでも、葉の裏面は全体に毛が密生するものから、脈上のみ毛があるものまで様々で、刺の有無と毛の多少は殆ど関係がないようである。したがって、Franchet et Savatier がタラノキとメダラとの区別に取り上げた分類の基準は成り立たない。毛には関係なく、葉柄の刺の有無が両者を区別する特徴と言える。したがってここでは茎には刺があるが、葉に刺のないものをメダラと呼ぶことにする。

A. canescens Sieb. et Zucc. がタラノキなのかメダラなのか問題になってくる。この原記載は最初に *A. frutescens, inermis?* と書かれていて、それ以外の部分には刺についてなにも触れていない。なぜ疑問符を付けたのか、それが原因になって中

井先生を初め多くの人に *A. canescens* を刺のあるタラノキと考えさせているわけである。Siebold et Savatier は同じ論文の中でヤツデには刺がないとし、オニウコギでは刺の形の説明までしているのだから、刺があれば疑問符など付けずに記載する筈である。標本の茎の部分が不完全で刺がなさそうだけれど、そう言い切ってしまうとよいものかどうか迷った結果が疑問符になったものと考えられる。葉の部分には記載するほどの刺が無かったものと考えられる。メダラの定義からすれば、*A. canescens* は Franchet et Savatier が判断したように、メダラと考えてよいものである。葉の裏面の毛が少ないということだけで、これをタラノキと決めてしまうのは早計であろう。

葉柄に刺がないことでメダラを定義づけることは便宜的で、遺伝的ではあってもこの中には多分に個体変異の現象が入り込む可能性がある。分類学での品種としての性格を明瞭にする為には、毛の有無は別にして、葉だけでなく、茎にも刺が無いかわりに見られないものにして、遺伝的にも明瞭だと思われるものに限定すべきであろう。葉柄に刺が有っても無くても、茎に刺があっても、タラノキとメダラとは連続的で明瞭ではないので、両者の区別は民間での習慣として認め、分類学的には品種として区別する必要はないものと思う。しかし現在、畑で栽培しているものは、葉に刺のないメダラであって、品種としての存在価値はあるので、学名を訂正しておく。数年前からトゲナシタラノキというものが園芸カタログに現れてきた。駒緑、静岡などの園芸品種が作られている。実物を見ていないのでどのようなものか分からないが、茎にも殆ど刺がないというから、シチウトウタラノキをもとに改良したものかもしれない。現にシチウトウタラノキをトゲナシタラノキと呼んで栽培している人がいる。

Aralia elata (Miq.) Seemann f. *canescens* (Sieb. et Zucc.) Yamazaki, comb. nov.

Aralia canescens Sieb. et Zucc. in Abh. Akad. Muench. 4-2: 202 (1845).

Aralia spinosa L. *β. canescens* Fr. et Sav., Enum. Pl. Jap. 1: 192 (1875).

Aralia elata (Miq.) Seemann var. *canescens* (Fr.

et Sav.) Nakai in J. Arn. Arb. 5: 31 (1924).

Aralia elata (Miq.) Seemann var. *subinermis* Ohwi in Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo 33: 80 (1953).

Aralia elata (Miq.) Seemann f. *canescens* (Fr. et Sav.) Yamazaki in J. Jap. Bot. 62: 190 (1987).

Aralia elata (Miq.) Seemann f. *subinermis* (Ohwi) Jotani in J. Jap. Bot. 67: 365 (1992).

Jap. name. Medara.

Distr. The same with f. *elata*.

(東京大学理学部附属植物園)

エゾヤマゼンゴについて (山崎 敬)

Takasi YAMAZAKI: On *Coelopleurum trichocarpum* (Hara) Kitagawa

エゾヤマゼンゴは北海道の高山の草地に生え、原 寛氏が *Angelica trichocarpa* Hara の名で独立種として記載したものである。その後 *Coelopleurum trichocarpum* (Hara) Kitagawa としてエゾノシシウド属に移された。しかしその後で原氏、北川氏共にさらに変更している。原氏はエゾノシシウドもエゾヤマゼンゴも北アメリカにある *C. lucidum* (L.) Fernald の変種としそれぞれ var. *gmelinii* (DC.) Hara, var. *trichocarpum* (Hara) Hara とした。北川氏は本州中部の高山に分布するミヤマゼンゴと殆ど異ならないとして、その品種 *C. multisetum* (Maxim.) Kitag. f. *trichocarpum* (Hara) Kitagawa とした、両者の見解は全く異なっているわけである。

C. lucidum はグリーンランドから北アメリカの西北部の海岸に生育するもので、生育環境は海岸生のエゾノシシウド *C. gmelinii* (DC.) Ledeb. に似ている。しかしエゾノシシウドより小さな小葉に裂けることでかなり異なるので、Hultén (Fl. Kamt. 3: 166, 1929) や Schischkin (Fl. URSS 17: 33, 1974) は、両者をそれぞれ別種として扱っている。*C. lucidum* は葉の形はむしろエゾヤマゼンゴに類似する。しかし前者の小葉は無毛であるが、後者の小葉は裏面に剛毛状の短毛が生える。また前者の花柄や小包葉には乳頭状のごく短い毛があるのに、後者では剛毛状の短毛が生える。また小葉の先は後者のほうがより尖っているので、海岸生でない点からも別の種として扱うべきものであろう。

エゾヤマゼンゴに一番近いものは、北川氏が言うようにミヤマゼンゴである。生育環境もほぼ類

似する。エゾヤマゼンゴの小葉は卵形から狭卵形で鋭頭であるのに、ミヤマゼンゴでは狭卵形から披針形で、鋭尖頭である。最も異なるのは果実で、エゾヤマゼンゴでは長楕円形で長さ 5 - 6 mm, 幅 2 - 2.5 mm であるのに対し、ミヤマゼンゴでは広楕円形で、長さ 4 - 6 mm, 幅 2.5 - 4 mm である。エゾヤマゼンゴの果実はまだやや未熟のもので、成熟したものを調べる必要があるが、ミヤマゼンゴの未熟のものでもエゾヤマゼンゴとは異なる。エゾヤマゼンゴの小花柄や小包葉には粗い短毛があるが、ミヤマゼンゴでは乳頭状のごく短い毛である。しかし夕張岳には時に粗い毛のものと同様の毛のものが混じる。葉や果実の形が異なるので、近縁ではあるが、別種として扱うべきだと考える。種名としては *Angelica rupestris* Koidzumi が最も早い。原氏はこれが同種とは気が付かなかったようで、この名には触れていない。北川氏はエゾヤマゼンゴをミヤマゼンゴと同種としたので、*A. rupestris* を異名として引用している。この Holotype (Fig. 1) が東大にあるが、北川氏の扱いのとおりエゾヤマゼンゴそのものである。

Coelopleurum rupestre (Koidz.) Yamazaki, comb. nov.

Angelica rupestris Koidz. in Bot. Mag. Tokyo 30: 79 (1916).

Angelica trichocarpa Hara in J. Jap. Bot. 11: 624, f. 22 (1935).

Coelopleurum trichocarpum (Hara) Kitagawa in Rep. Inst. Sci. Res. Manch. 2: 280 (1938).

Coelopleurum lucidum (L.) Fern. var. *trichocarpum* (Hara) Hara, Enum. Sperm. Jap. 3: 307